

異世界の宮廷楽士として
転生した Ω カントが
王の側近の β を装って
いたが宰相の α に秘密
を握られ「陛下に伝え
てほしくなければ」と
執務室で毎晩脅される
話

「っ……ん……っ」

冷たい。革越しても分かる、 α の指の正確さ。縫い目がクリトリスの包皮に引っかかるたびに、リュートの太腿が震える。

執務室は静まり返っていた。深夜の宮廷に人の気配はなく、蠟燭の芯が爆ぜる音だけが時折響く。その静寂の中で、リュートのカントから滲み出す蜜の音が——ぬちり、と——ひどく卑猥に鳴った。

「濡れてきたな」

ヴァルターの声に感情はない。書類を読み上げるのと同じ温度。

「 β を装って宮廷に入り込んだ Ω カントが、 α の指一本で蜜を垂らす。——当然のことだ」

「……っ、うるさ……っ」

「口答えをするなら、やめてもいい。明朝、陛下に報告書を提出する。お前が Ω カントであるという——」

「っ……やめて、ください……っ」

リュートは執務机の端を掴んだ。爪が木に食い込む。背中では冷たい天板に押し付けられ、脚はヴァルターに割り開かれている。

（こんなの——ただの身体の反応だ。 α のフェロモンに、身体が勝手に——）

そう自分に言い聞かせても、カントは嘘をつかない。ヴァルターの革手袋が割れ目の間に沈み込むたびに、とろりと蜜が溢れて指を濡らした。

「触るな……っ、そこ……っ」

「どこだ。言え」

「……っ」

「言わなければ分からない。——ここか？」

革の指先がクリトリスの包皮を剥いた。ぷくりと顔を出した小さな突起を、縫い目のある指腹でぐり、と押し潰す。

「ひ……っ♡ あ……っ♡」

リュートの腰が跳ねた。机の上の書類が音を立てて散らばる。

「声が出たな。楽士の喉は嘘がつけないらしい」

ヴァルターの琥珀色の目が、上からリュートを見据えている。獲物を品定めする獣——いや、もっと冷たい。実験対象を記録する研究者の眼だ。

革手袋がクリトリスを転がす。こりこりと、硬い革の感触が敏感な突起をこねくり回した。前世で音大に通っていた頃に叩き込まれた呼吸法——横隔膜を使って、喘ぎを飲み込む。

「……っ、ん……っ」

「我慢するのか。面白い」

ヴァルターの手が止まった。

リュートが安堵しかけた、その瞬間——ヴァルターが革手袋を歯で引き抜いた。ぱさり、と手袋が床に落ちる。

素手が、直接カントに触れた。

「ひ……っ♡♡」

温度が違う。

革越しの冷たさとは全く違う、人間の手の体温。αの指。それがカントの濡れた粘膜にじかに触れた瞬間、リュートの呼吸法は何の役にも立たなかった。

「お……っ♡ やめ、素手は……っ♡」

「何が違う」

「全っ、然、違……っ♡♡ 熱……っ♡」

ヴァルターの指がカントを探る。肉ヒダを開き、入口の周囲をなぞり、ぬるりと蜜を指に絡め取った。クリトリスに戻り、包皮を剥いたまま——指の腹で直接、勃起した突起を擦り上げる。

「おお……っ♡♡ そこ、だめ……っ♡♡ 直接、は……っ♡♡」

リュートの声が裏返った。楽士として鍛えた声帯が、制御を離れて嬌声を紡ぐ。

恥ずかしい。音楽以外でこの喉から漏れる声が——こんなにも淫らだなんて。

（俺は楽士だ。この指でリラを弾くために転生したんだ。こんな……こんな場所で、こんな声を出すために生まれたんじゃない）

「指を入れるぞ」

「え——、ま、待っ……」

返事を待たず、ヴァルターの長い中指がカントの入口に沈んだ。

じゅぷ、と蜜が音を立てて指を飲み込む。

「んん……っ♡♡♡ なかつ……♡♡」

「狭いな。本当に誰にも使わせていないのか」

「使わせてっ……ない……っ♡♡ あたり、まえ……っ♡」

（この身体は——男なのに女性器がついているこの身体は、俺のコンプレックスの塊だ。誰にも見せたことすらなかったのに——）

ヴァルターの指がカントの中をゆっくりと探った。指先が前壁に触れ、少しざらついた場所を見つけ——圧迫する。

「ひおっ♡♡♡」

リュートの視界が白く弾けた。腰が浮き上がり、机の端を掴む手が滑る。

「ここか。——反応が分かりやすい」

ヴァルターの指がその場所を往復する。ずり、ずり、と粘膜を擦るたびに、リュートの喉から制御不能な声が溢れた。

「やっ……♡♡ そこ、ずっと擦るなっ……♡♡ ああっ♡♡ おかしく、なる……っ♡♡」

「おかしくなれ。——お前の音楽の才能より、こちらの才能のほうがよほど見どころがある」

「言うな……っ♡♡！ それだけは……っ♡♡」

リュートの目から涙がこぼれた。信念を踏みにじられる痛み。音楽ではなく、カントの反応で値踏みされる屈辱。

——なのに、身体はヴァルターの言葉に反応して、きゅう、とカントが指を締め付けた。

「泣いても止まらないぞ。——お前が自分でここに来たんだ」

ヴァルターが指を二本に増やした。カントの粘膜が押し広げられ、みちみちと軋む。二本の指が中を掻き回し、蜜を掻き出した。水音が執務室に満ちる。

ぐちゅ、ぐちゅ、ぐちゅ——

静かな部屋の中で、その音だけが卑猥に鳴り続ける。

「ひっ……♡♡ あっ♡♡ 音、やだ……っ♡♡ 聞きたくない……っ♡♡」

「聞け。これがお前の身体が出してる音だ」

ヴァルターは手を止めなかった。リュートの反応を観察しながら、速度と角度を変え、最も声が出る場所を——最も蜜が溢れる角度を、精密に割り出していく。

（やだ……っ♡ 指二本で、こんなに——カントの中がぐちゃぐちゃに掻き回されて——頭が溶ける♡♡）

「おっ♡ おっ♡ おっ♡ だめっ♡♡ なにか、来る……っ♡♡」

「来い。——俺の指でイけ」

「嫌っ♡♡ こんなのでイくなんてっ♡♡ 俺は楽士——おおおおっ♡♡♡」

カントがびくびくと痙攣した。ヴァルターの指に絡みつき、ぎゅうぎゅうと締め上げる。溢れた蜜が手のひらを伝い、肘まで垂れて、机の上に染みを広げた。

リュートは肩で息をしながら、涙で滲む視界でヴァルターを見上げた。

ヴァルターは蜜に濡れた指をリュートの目の前に差し出した。親指と人差し指の間で蜜が糸を引いている。

「これがお前の本性だ。覚えておけ」

「……っ」

「今夜はここまでだ。明日も同じ時間に来い。来なければ——」

「……分かって、います……っ」

ヴァルターが身を引いた。リュートは震える手で乱れた衣服を掻き合わせ、机から降りる。膝が笑っている。まともに歩けない。

執務室の扉を閉める音が、石造りの廊下に反響した。

自分の足音だけが響く、深夜の回廊。リュートは壁に手をつきながら歩いた。カントがまだ疼いている。ヴァルターの指の感触が残っていて、未完成のまま放り出された身体が——続きを求めている。

（馬鹿な。こんなの、身体の反応にすぎない）

自室に戻り、ベッドに倒れ込む。天蓋を見上げた。指が震えている。リラを弾くための、この長い指が。

無意識に、手が下腹部に伸びた。

（違う。これは——確認だ。あの男がどこを触ったのか、自分で把握しておかないと）

言い訳にもならない。指先がカントに触れた瞬間——ヴァルターの手の温度を思い出して、息が詰まった。

「……っ♡♡」

生まれて初めて、自分でそこに触れた。

翌朝。抑制薬を飲んで宮廷に出る。いつもと変わらない、βの宮廷楽士としての一日。

リラの弦を弾く。旋律が大広間を満たす。国王が目を閉じて聴き入り、廷臣たちが拍手する。
——何も変わっていないはずだ。

回廊でヴァルターとすれ違った。

「宰相閣下」

「楽士殿」

事務的な挨拶。それだけ。昨夜のことなど何もなかったかのように。ヴァルターは黒手袋を嵌めた手で書類を抱え、歩き去っていく。

あの手袋の下指が——昨夜、俺のカントの中にいた。

リュートの鼓動が跳ねた。足を速めてその場を離れる。
(何を考えてるんだ。あれは脅迫だ。秘密を握られて、身体を差し出させられてるだけだ)

四夜が過ぎた。毎晩、執務室に通った。

二夜目。ヴァルターの指がカントの奥まで侵入した。子宮口の手前を指先でこつ、と叩かれて、リュートは声を殺しきれずに絶頂した。

三夜目。「自分で脚を開け」と命じられた。

「っ……」

「命令だ。自分の手で、腿を持って開け」

リュートは屈辱に震えながら、自分の両腿を掴み、カントを曝した。ヴァルターは椅子に座ったまま、じっとそれを眺めた。

「……もう充分見たでしょう……っ」

「まだだ。——お前が自分で開いたカントを、お前に見せたい」

ヴァルターが手鏡を取り出した。カントの前にかざす。鏡の中に——蜜でてらてらと光る、リュート自身の女性器が映っている。

「っ……♡♡！ 見たく、ない……っ♡」

「見ろ。これがお前だ。βのふりをしていても、ここだけは嘘をつけない」

鏡に映ったカントを見つめさせられながら、ヴァルターの指に中を掻き回された。自分のカントが指を咥え込む姿を、自分の目で見せられる。蜜が指を伝い、鏡の縁を汚していく。

「あ……っ♡♡ やだっ……♡♡ 見ながらなんてっ……♡♡」

「見ながらのほうが締まりがいいぞ。自分でも分かるだろう」
(分かる——分かってしまう♡♡ カントがきゅうきゅう締まって……♡♡ 鏡で見てるのが恥ずかしくて、余計に……っ♡♡)

四夜目の夜。ヴァルターが初めて「取引」を持ちかけた。

「お前の秘密を守る代わりに、一つ頼みがある。国王の側に出入りするお前に、情報を集めてもらいたい」

リュートは拍子抜けした。身体ではなく、情報が目的だったのか。

「……それだけですか」

「それだけだ。持ってくれば、毎晩来る必要もない」

飲んだ。

関係が「脅迫」から「政治的取引」に変わった。対等ではないにしろ、身体を差し出す必要はなくなった。情報を渡せば、楽士でいられる。

昼間は宮廷でリラを弾き、時折ヴァルターに情報を渡す。身体の関係はなくなった。

——安堵した。はずだった。

夜、自室でリラの練習をしていると指が震えた。弦を弾く指先が——ヴァルターに触れられた場所に重なる。革手袋の冷たさ。素手に変わった瞬間の温度差。クリトリスを転がされたときの——

ぱつん、と弦が切れた。

リュートは自分の指を見つめた。汗ばんでいる。下腹部が疼いている。カントが——誰にも触れられていないのに——じわ、と蜜を滲ませている。

(抑制薬の副作用だ。そうに決まっている)

ある朝。中庭でリラを弾いていると、ヴァルターが通りかかった。足を止め、演奏を聴いている。

演奏が終わると、ヴァルターが口を開いた。

「いい演奏だった」

素直な言葉。リュートは面食らった。

「……ありがとうございます、宰相閣下」

ヴァルターは何も答えず去っていく。しかしリュートは見た。あの琥珀色の目が、一瞬——ほんの一瞬だけ——柔らかくなったのを。

（この人にも、人間らしい感情があるのか）

そんなことを考えている自分に気づいて、リュートは首を振った。

（駄目だ。あいつは脅迫者だ。俺の秘密を握って、身体を——）

でも、もう触れてこない。取引のことも、淡々とこなしている。

もしかしたら——もうあの夜のことは終わったのかもしれない。

そう思い始めた、矢先だった。

闇市場の仲介人が逮捕された。

抑制薬のルートが、断たれた。

リュートの手元には、あと二日分の抑制薬しか残っていない。

一日目——薬を飲む。まだ大丈夫だ。しかし夕方には微かにフェロモンが漏れ始めた。宮廷楽団の練習中、隣のβ楽士が「何かいい匂いがしないか」と首を傾げる。

「新しい香油だ」

冷や汗をかきながら誤魔化した。

二日目——最後の一錠。薬の効果は夜半には完全に切れる。

明日の朝には、宮廷中に Ω のフェロモンが漏れる。楽士の座を失うだけでは済まない。 Ω カントと知れたら——高位貴族への「献上品」にされる。リラを弾く指は、二度と弦に触れられない。

一人だけ、頼れる相手がいた。

深夜の廊下を歩く。革靴が石畳を叩く音が、静寂の中で異様に大きく響く。一步ごとに心臓が鳴る。

執務室の扉を叩いた。

「——入れ」

ヴァルターは書類仕事をしていた。蠟燭の灯りに照らされた横顔が、リュートを一瞥する。

「珍しいな。呼んでもいないのに来るとは」

「……抑制薬が、切れます」

ヴァルターの目が変わった。琥珀色の瞳の奥で、何かが——獣の影のようなものが、ちらりと動いた。

「それで？」

「……代わりの薬を、手配してください。宰相のお力があれば——」

「できる」

ヴァルターが立ち上がった。書類を脇に退け、リュートの前に立つ。見上げるほどの体格差。 α のフェロモンが——抑

制薬の効果が薄れかけたリュートの身体を、じわじわと侵す。

「だが——お前は今、何の交渉材料もなく俺の前に立っている。情報という対価はもうない。何で払う？」

カントが疼いた。ヴァルターのフェロモンに反応して、触れられてもいないのに——蜜が滲む。

「……身体で」

言ったのは、自分だ。脅されたのではない。自分の口で——自分の意志で。

ヴァルターの目が細くなった。

「——お前の音楽の誇りはどこへ行った」

その言葉が、信念の真ん中を貫いた。

（そうだ。俺は——音楽で立つために転生したんだ。この身体ではなく、この指で——）

「……っ」

「答えろ」

「……今は、生き延びるほうが先です」

「そうか。——ならば代価は受け取る」

ヴァルターがリュートの腰を掴み、執務机の上に持ち上げた。今度は最初から手袋を外している。素肌の掌がリュートの腰骨に食い込んだ。

「先に言っておく。今夜は指だけでは済まない」

リュートの心臓が跳ね上がった。